Title	ベルクソン『道徳と宗教の二源泉』における神秘家の役割
Sub Title	Le rôle du mystique dans Les deux sources de la morale et de la religion de Bergson
Author	西山, 晃生(Nishiyama, Teruo)
Publisher	慶應義塾大学倫理学研究会
Publication year	2017
Jtitle	エテイカ (Ethica). Vol.10, (2017.) ,p.29- 45
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12362999-20170000-0029

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ベルクソン『道徳と宗教の二源泉』における 神秘家の役割

西山晃生

はじめに

『道徳と宗教の二源泉』（以下『二源泉』）において、ベルクソンは、限られた数の成員を持つ「閉じた社会」と、全人類を含む「開かれた社会」を区別する。両者は根本的に異なるため、「閉じた社会」から「開かれた社会」への「移行」（DS 77）¹には飛躍が必要である。その飛躍は、自然によって人間に課された条件を乗り越える選ばれた個人によって担われる。こうした個人は「神秘家」と呼ばれる。「移行」は、神秘家の「呼びかけ」（DS 84、他）が広まっていくことによって果たされる。

こうした議論が誤解を受けやすいことは間違いない。本稿は、ベルクソンが神秘家に付与した役割を明らかにし、彼自身が神秘主義の脱秘教化を図っている（少なくともそのような側面はある）ことを示す。議論は以下の順序で進められる。最初に、人間が生きるために従っている条件としてベルクソンが提示しているものを確認する。次に、神秘家がいかなる意味でこの条件を乗り越えているのかを探る。最後に、神秘家が他の諸個人（ふつうの人々）に及ぼす影響についてのベルクソンの記述を検討する。

1

一つの全体としてとらえられた生命のうちには、反復を許す機械的な構造も、あらかじめ定められた目標も見いだせない。生命は「無際限に続く進展の連続」(EC 27)であり、次々に予見不可能な新しいものを生み出していく。「不断の変容」(EC 233)であるという、まさにそのことによって「不断の創造」(EC 23)となる、一つの力。『創造的進化』においてベルクソンが提示した生命観は、ごく大まかには以上のようなものである。

生命をこのようなものととらえたとき、生物種の位置は両義的なものになる。一方において、種は紛れもなく創造的な力としての生命によって生み出される。他方、ひとたび生みだされた種そのものは、創造も根本的な変容もしない。というのも、生物種がそれとして存在し続けられるのは、決められた形態を再生産し、決められた生き方を反復するかぎりにおいてだからである。全体としての生命からすると、種は創造の成果でもあり、創造が止まってしまった点を示してもいる。

[生物の] 形態の豊かさと独自性は、まさに生命の開花を示している。しかし、美が力を意味するこの開花のうちで、生命は躍動の停止とより遠くへ押し進める力の一時的な消失をも同様に示している。(ES 25、強調は引用者)

種は「創造的エネルギーが通りすがりに産出した結果」(DS 224)であり、ここでは生命の進展が「局所的な固形化」(EC 193)を被っている。そして、生物種は自らを生み出した創造する力そのものから切り離されている。偶然そうなのではない。種は「定義上、停止である」(DS 249)ので、絶えざる創造とは相容れないのである。

この「停止」はすべての生物を束縛する。生物は自らが属す種に与え

られた条件の下で生きるほかないからである。「種を形成するあらゆる作用と同様、人間種を形成した作用も停止であった」(DS 50) 以上、人間も例外ではない。もっとも、人間だけがこの「停止」から抜け出して再び「前進」(DS 50) できるのであるが、そのことについては後述する。ここでは人間に固有の生の条件について触れておこう。

2

人間を特徴づけ、条件づけもする性質は社会性と知性である (DS 121)。まずは前者から見よう。「われわれの各々は自分自身に属しているのと同じく社会にも属している」(DS 7)。これは、単に事実として個人的自我と社会的自我が支え合っていることを指すのではない。

実際のところ、個人と社会はたがいに含みあっている。個人は集まることによって社会を構成する。社会は各個人のうちにあらかじめ形成されており、そのことによって個人の一側面全体を規定する。(DS 209-210)

個人のあり方は社会的な連帯によって決定される。「自我の堅固さ *solidité* はこの連帯性 *solidarité* のうちにある」(DS 8) ので、人間は、社会的にふるまうことなしに安定した形で自己を維持することができない。社会からの孤立が心身に不調をもたらす (DS 109) という事実は、こうしたあり方が生物学的次元で決定されていることを示す。そして、個人と社会との関係がこのようなものであるならば、社会の形はおのずと決まってくるはずだ。次に、自然によって条件づけられた社会を見てみよう。

ベルクソンは、生物の進化に関して獲得形質の遺伝を認めない (EC 77-87)。この方針は『道徳と宗教の二源泉』においてもそのまま引き継がれる。『二源泉』では、人間社会の不変性を示すために同じ議論が持ち出さ

れている。知識や習慣などが遺伝によって伝わらない以上、各社会を覆っているそれら「獲得物 l'acquis」(DS 25)を引きはがせば、時間や場所を超えてすべての社会に共通の本性が姿を現すというわけだ。

…社会から呼び出され規律を与えられた人間が、何世紀にもわたる文明の獲得物をその社会からどれほど与えられようと、それでも社会は自ら厚いニスで覆ったこの原初的本能を必要としている。要するに、われわれが社会的義務の根底に見出した社会的本能は常に一本能は相対的に不変なので一どれほど広大なものであるにせよ、閉じた社会を目指す。(DS 27)

「常に一定数の個人を含み、他は排除する」(DS 25)社会。「成員が厳格な責務によって相互に結合され」(DS 97)、その結合を「他の社会に対して自衛する」(DS28)姿勢によって保つ社会。ベルクソンが「閉じた社会」と呼ぶ集団が示すのは、このようなあり方である。人間は生来、こうした「閉じた社会」の形成へと向かっている(DS 53)。

「自我の堅固さ」つまり個人の安定したあり方が他の個人との「連帯性」に存するのであれば、各個人がこのような社会を拒む契機は何もない。ベルクソンの「閉じた社会」とは、単に個人と緊密に結びついた社会であるというだけでなく、そうしたあり方から脱却する可能性を自らのうちに持たないものである。とはいえ、「閉じた社会」とは必ずしも孤立した社会であるわけでも、発展をやめた社会であるわけでもない²。動物と異なり知性を持つ人間の社会は常に変化し(DS 97)、拡大する。

知性は、この「閉じた社会」に変化と、そしてそれとともに危機をもたらすものと位置づけられる。上で見たような個人と社会との緊密な関係を破綻させてしまう可能性があるからだ。知性によって反省がもたらされると、社会よりも自己を優先させる利己主義³が避けがたくなり(DS 126)、死の不可避性を知り(DS 135-7)、予測できない未来への不安に苛まれる

(DS 144-5)。これらの事態が生じると、個人と社会との関係が疎遠なものになり、個人から行動する意欲が損なわれる。「閉じた社会」においては、社会との緊密な連帯によって個人の生が保たれているのであるから、このような形で社会から離れることは、生そのものとの関係に「欠損」(DS 223)をもたらす。知性は社会のあり方を変化させ(ただし、この変化は「閉じた社会」の枠を出ない)「人々を隷属状態から解放した」(DS 56)が、その「代償」(DS 216)として「生への密着」を損ねてしまうのである⁴。

虚構の表象をつくりだす能力、ベルクソンが「仮構機能」と呼ぶ能力は、この文脈において理解される。虚構は(少なくともその起源においては)、想像力の自由な発露によって目的もなく生じたのではない(DS 112)。「現実の模造品」、それも「生き生きとして心から離れない *vive et obsédante*」(DS 113) 表象によって人を行動へ導くこと、これこそ「仮構機能」の存在する理由である。言い換えれば、この機能は行動への意欲を減退させる知性に対する「防御反応」(DS 127, 137, 146、強調はベルクソン)として自然によって用意されている。たとえば利己主義に対しては「禁止し、威嚇し、抑圧する」(DS 126) 守護神の、死の不可避性に対しては「生命の死後の存続」(DS 136) の、未来への不安に対しては「好意的な諸力 *puissances favorables*」(DS 146) の表象が現れ、われわれの行動を導く。

個人と社会が支え合い、共に安定しているありかたを「平衡」(DS 135) 状態だと考えれば、知性は平衡に危機をもたらす「障害」(DS 219) である。「仮構機能」は、個人の心理状態に対しても、個人と社会の関係に対しても、社会のあり方に対しても、平衡を「回復する」(DS 135) 役目を果たすだろう。だが、「教え上げればきりがないうような」(DS 219) 危機に対する、同じくらい多数で多様な仮構の産物は、「複雑化」(DS 219) する一方である。平衡の回復は決して危機の根本的な解消ではない。こうして、人間は「不安定な平衡状態」(DS 241) において生きる

ことを余儀なくされる。

まとめておこう。人間は「閉じた社会」のうちでしか生きられないということ。社会の一員として行動することへの不安や、社会よりも自分を優先させる誘惑を覚えてしまうこと、それに対して自らを社会的なふるまいへと引き戻す表象からも逃れられないということ、これらすべてが複雑に入り組んだ状況の中で、不安定な平衡を保ちながら生きていくよりほかないこと。以上のすべてが人間という種に課せられた生の条件である。

「閉じた社会」は他の社会への「潜在的敵意」(DS 55)によって成り立つのであり、原理上、一つの特異な社会であるにすぎない。したがって、どれほど拡大しても「人類」には達し得ない(DS 28, 34)し、その社会を超えた普遍的なものを自らのうちから導き出すことはできない。ベルクソンによれば、多くの人がこの点を誤解している。たとえば、祖国愛を拡大すれば人類愛に至るという展望は広く共有されている⁵。また、ひとつの社会の中で成員間の関係に「平衡を保つ」(DS 71)ためのものでしかない「相対的正義」(DS 73)のうちに「普遍的正義」(DS 76)が不十分な形ではあれ含まれていると考えられている。「同類に対する人間の義務」(DS 25)が語られもする。しかし、ベルクソンはこれらの「漠然とした」(DS 25)信念を、現実には即していないという理由であっさり退ける⁶。

以上から、次のように言うことができる。第一に、人類について考えるためには「閉じた社会」へ向かうのとは別の力、「閉じた社会」のうちには見いだされないものを生み出す「創造の努力」(DS 78)が必要である。第二に、「人類」という言葉が理解され、「人間としての人間に対する義務」(DS 25)、「権利の平等と人格の不可侵」(DS 78)といった概念が「効力を発揮している」(DS 78)以上、そうした努力は既に開始されている。この努力は、上で見たような、種としての人間に課せられた条件を乗り越える性質のものでなければならない。

3

人間の本性は「不変」(DS 228)であり、また「追い払うことができない」(DS 289)。そうでないならば、自然によって与えられたものと習慣や教育によって身についたものとを区別することなどできなかっただろう。だが、本性であることは決定的であることと異なり、不変であることは変えるための努力が不可能であることを意味しない。あらゆる生物の中で、人間だけが「不断の創造」である生命へ身を置き直すことができ、そのことによって種の制約から脱することができる(EC 265)。『二源泉』で描かれる「閉じた社会」から「開かれた社会」への「移行」は、まさにこうした過程を通じて人間の本性を作り変え、社会のあり方を刷新するための努力である。だが、そのようなことはいかにして可能になるのだろうか。

種としての制約が問題になっている以上、人間という種が全体として一挙にこれを乗り越えることはできない。したがって、これをなすのはあくまでも個人である。また、個人であれば誰にでも、というわけではない。もしすべての個人に、あるいは多くの個人に可能なことであるならば、そもそも最初から制約など存在していなかったのである(cf. DS 226, 291)。こうして、種としての制約を乗り越えるための努力は「特権的個性」(DS 48)によって先導されることになる。ベルクソンが「神秘家」と呼ぶのはこのような人間に他ならない。人々は彼らから投げかけられた「呼びかけ」(DS 67)に「応じる」(DS 67)こと、あるいは(同じ事態を指すが)彼らを「模範」(DS 56)とし、これを「模倣する」(DS 30)ことによって神秘家に従う。

『二源泉』において最も理解しがたいのは、この「特権的個性」の位置と、彼らに従う人々に関する記述だと思われる。「特権的個性」の「特権」は何に由来するのか。「創造の努力」とは何のことか。人々を牽引するこうした人物が現れなかったらどうなるのか。人々はなぜ彼らを「模倣」し、彼らの「呼びかけ」に「応じる」のか。「模倣する」「応じる」と

いうとき具体的に何をするのか。ベルクソンにとって「特権的個性」とは（とりわけキリスト教の）神秘家であり、「開かれた社会」が「神秘的社会」（DS 85）とも呼ばれることは事態をより深刻にするかもしれない。神秘家や神秘主義というだけで、少なからぬ人を遠ざけてしまうからである（DS 251）。

『二源泉』第三章は、その大半が神秘主義と神秘家に関する記述で占められている。しかし、本稿でそのすべてを扱うことはできない。たとえば、神秘家が常人には達し得ない経験を証言し「哲学的探求の強力な補助」（DS 266）となることには触れない⁷。神秘主義が登場しうる物理的条件（DS 249-250）についても同様である。ギリシャやインドの神秘主義、そしてベルクソンが「完全な神秘主義」（DS 240）と評価し、何人かの固有名を挙げるキリスト教の神秘主義に関する記述にも言及しない。ここでは、神秘家が具体的にどのような人物として姿を現すか、ということに注目してみよう。

4

神秘家とは、さしあたりふつうの人には開かれていない「特異で特権的な経験」（DS 264）を経た人物である。それが神との合一を指すのは確かだが、問題はその内実である。しばしばこうした経験そのものだと思われる（DS 102）「見神」や「脱我」といった状態は、たとえ「神秘体験」の一部をなすとしても、それだけでは不完全であり、中途の段階ではない。神秘主義の最終的な境地がどこにあり、「完全な」神秘家が何をなすのかを知るためには、『二源泉』における創造の意味を確認しておく必要がある。

神秘主義の完全なあり方について、以下のように言われる。「それ〔完全な神秘主義〕は、行動、創造、愛であろう」（DS 238）。『二源泉』において、創造は明確に愛という形をとる。しかし、両者はどのようにして重

なるのか。この愛は、既に存在する特定の対象へと向けられるのではなく、「愛し、愛されるべき」者（DS 273）を自らとは区別されたものとして（DS 273）生み出す作用そのものである。「すべての人間」（DS 247）「全人類」（DS 254）が、このような形で「現実存在 existence へと招かれる」（DS 273）。

既に見たように、種とは創造の停止であり、あらゆる種の中で人間だけが種の制約を超えて「不断の創造」へと復帰することができるのだった。愛が導入されることで、この事態はとらえ直される。「愛されるべき」者とは、自ら創造する者に他ならない。人間が創造できるのは、そのような者として神によって創造されるからだ。こうして、創造＝愛は「創造者を創造し、自らの愛に値する諸存在を仲間に入れる神の企て」（DS 270）として理解される。以上を念頭に置いて、神秘家についての定義を確認しよう。

われわれが見るところ、神秘主義の到達点は生命が示す創造的努力と触れ合うこと、したがって部分的に一つになることである。この努力は神そのものではないにしても、神から出ている。偉大な神秘家は、物質性によって〔人間〕種に与えられた限界を乗り越え、そうして神の業 *action divine* を継続し、延長するような個性であろう。これが私の定義である。（DS 233）

神秘家と神の合一は「部分的な」ものであり、両者はあくまでも別のものである。神秘家は「神の業」の一部になるのではなく、「神の業」を引き継ぐことによって自身が創造を担う。そして、創造の担い手であるということは、新たな創造者を創り出すことと等しい。したがって、神秘家は自らに触れる他の人間にも種の限界を乗り越えさせ、創造を開始させるのでなければならない。こうして、神秘家の役割は「最初に模範を示すことによって、人類を根本的に変容させる」（DS 253）こと、あるいは「被

造物である種を創造の努力に変換する」(DS 249) ことになる。

以上をふまえたとき、「見神」や「脱我」が神秘家の達すべき境地と程遠いことは明らかだ。第一に、これらはすべて観照であり、観照とは停止である (DS 246) 以上、そこでとどまる神秘主義は不完全なものでしかありえない。第二に、これらは「異常な状態」(DS 242) であり、到底「模範」たりえない。

この第二の点は、神秘家にとっての大きな困難と関係している。彼が触れた「創造の秘密」(DS 248) は「表現し得ないもの」(DS 247) であり、言葉で伝えることはできない。「模範」は彼自身の創造によって示すしかない。そして、地上に生きる人間である限り、創造は具体的な行動という形をとるしかない。こうして、神秘家は「偉大な行動人として姿を現す」(DS 102)。では、神秘家の行動の何が傑出しているのだろうか。

たしかに、われわれは不安定な平衡状態のうちに生きており、精神の平均的健康 *santé moyenne* は、身体のそれと同様定義しづらいものである。とはいえ、堅固に確立した例外的な知的健康というものがあり、それは苦もなく認められるものである。その知的健康は行動への意欲、環境へ適応し、適応し直す能力、しなやかさと結びついた揺るぎなさ、可能なことと不可能なことを見抜く予言的な識別、込み入った状態 *complications* に打ち勝つ単純な精神、要するに高次の良識 *bon sens supérieur* によって明らかになる。これこそまさにわれわれが語る神秘家において見出されるものではないだろうか。(DS 241)

反省能力を持ち、周囲との関係を意識するようになると、その関係が入り組んでいくにつれて不安や心配に支配され、行動への意欲が減退する。このような複雑な状況の中で不安定な平衡を保ちながら生きることは、種としての人間の宿命だった。この条件のもとでは「生への密着」は絶えず

危機にさらされる。これに対して、神秘家の「単純な精神」はこうした事態と無縁である。状況の複雑さを困難として受け止めないからだ。神秘家は、生命そのものである「創造的努力」に「浸透され」ており、ただ創造すること、前進することによって自足している（DS 35, 270）。「個々の特殊な事物から離れることが生命一般と密着することになる」（DS 225）以上、「生への密着」が脅かされることはない。

もちろん神秘家も個々の状況のうちで行動するよりほかないのだが、上で述べたような理由により、彼は自らが身を置く状況においてどのようにふるまい、周囲との関係をどのように保つか、あるいは変化させるか、といったことにその都度思い悩むことがなく、したがって自らの行動に制限をかけることもない。つまり、どのような状況に直面しても諦めることも怯むこともない強靱な行動力で状況を突破していく⁸。行動人としての彼の偉大さは、具体的にしたことではなく、力そのもののうちにある。

5

創造とは、創造する者を創造することであった。神秘家が「神の業」を受け継いで創造を延長するのであれば、彼は創造する者を新たに生み出すのでなければならない。「模範を示す」ことによって、人々を「創造の努力に変換する」とは、まさにこのことを指す。だが、神秘家が傑出した行動人であることと、彼のふるまいが「模範」「呼びかけ」として機能することとは別の事態であるように見える。彼の行動に触れた人々が、それを「模倣する」、あるいはそれに「応じる」ことによって「創造の努力」へと造り変えられる仕組みは、どのようなものだろうか。

二つのことを指摘しておかなければならない。第一に、「模範」に直接触れる必要は必ずしもないということだ。神秘家は突如現れるのではない（DS 251）。彼自身が既存の宗教を背景に持ち、彼の経験はこの宗教を通じて伝わっていく。こうして神秘主義は「通俗化」（DS 253）され、「た

いていの場合、薄められた状態で」(DS 225) 見いだされる。そのおかげで「幾人かの特権的な人たちが十全な形で所有していたものを、すべての人が少しずつ得られる」(DS 252) ようになる。「閉じた社会」の内にも神秘家のなしたことはすでに浸透しているのである。このような「神秘主義がそこに残した陶然とする芳香」(DS 247) から人が触発されることはありうる。もちろん、伝えられるのが創造である以上、その「芳香」には神秘家ひとりひとりの人格が刻まれているのでなければならない (DS 102)。とはいえ、人格に触れることは必ずしも対面することを意味しない。神秘家は「われわれが一度も会ったことのない人」(DS 30) でもよいし、さらに「その人物〔が誰であるか〕は大した問題ではない」(DS 31)。また、「呼びかけ」を「判明に聴く」(DS 67) ことができなくても構わない。

第二に、「呼びかけ」に「応じる」という事態は、事後的にしか理解されない、つまり「応じてしまっている」という形でしか知られないということである。『二源泉』においては、心の奥底にすでに生じてしまった「反響」を聴く (DS 31, 228, 260) という記述が繰り返されており、「応じる」という決断を下す場面は重視されない。では、この「反響」はどのような場面で生じるのだろうか。

ベルクソンは、神秘家の経験を「他の人も、事実上ではないにせよ権利上はたどり直すことができる」(DS 260) ものと考える。「事実上」できないのは、意志が足りないからだ。「われわれはそれを欲しないし、たいていの場合、欲することができないだろう」(DS 226)。神秘家とそうでない人間との差異がそこにしかないのならば、以下のようにいうことができる。

偉大な神秘家、あるいはその模倣者の一人の言葉がわれわれの誰かのうちに反響を見いだすとしたら、それはわれわれの心に一人の神秘家が眠っていて、ただ目覚める機会を待っているからではないだろうか。
(DS 102)

神秘家以外の人間は、種の限界を超えて創造的行動を行う意志を自ら持つことができない。意志が見いだされるとしたら、それは「呼びかけ」への「反響」、しかもおのずと生じてしまった「反響」という形においてである。「呼びかけ」がなされたこと、この呼びかけに応じて行動への意志が生じつつあることは、「反響」が見いだされるときにはじめて、そして一挙に知られる。「呼びかけられてはいるがまだ応答していない」という局面は現れない。同様に考えれば、「模範」は「模倣」が開始されてしまってからにはじめてそれとして姿を現すので、「模倣」されない「模範」はない、ということになるだろう。

ベルクソンは「神秘主義のうちにかさま、あるいは狂気しか見ない者」(DS 261)を一蹴する。このような人には何かを信じるための条件があり、神秘家のふるまいはその条件を満たしていないのだろう。しかし、「われわれの大半」(DS 260-261)は「反響」を聴いたことがある。もちろん、人数や割合の問題ではない。「模範」「呼びかけ」がすでに機能してしまっているものとして事後的に知られるということは、「模倣」「反響」との組み合わせがその都度新たに生じているということの意味する。このような現れ方しかしないのであれば、行動が「模範」「呼びかけ」として機能するための条件を問う必要はない。

以上の二点をまとめると、「模範」と「模倣」、「呼びかけ」と「応答」は、その語感から考えられるような親密な関係を必ずしも持たないということがわかる。人は多くの場合、誰のものかもわからない(だが確実に誰かのものである)創造への「呼びかけ」を、それと知らぬうちに受け取ってしまっており、そして受け取ったことを知るときにはもう創造へ向かってしまっている。

ベルクソンは「神秘家の決定的な *définitif* 魂の状態」(DS 277)として「歓喜 *joie*」を挙げる。そして、神秘家でなくても創造をなす者は「歓喜」を味わうことができる。

…われわれは歓喜があるところには必ず創造があることがわかる。創造が豊かであるほど歓喜は深まる。子どもを見つめる母親は歓喜に満ちている。なぜなら、彼女は肉体的にも精神的にも創造を成し遂げたと感じているからだ。取引を拡大する商人や事業の繁栄を見守る工場主は、それによって金銭を稼ぎ有名になれるから歓喜を覚えるのだろうか。富や名声はもちろん彼が覚える満足の大きな部分を占めるが、それらが彼にもたらすのは歓喜よりも快樂である。彼が真の歓喜のうちで味わうのは、うまく稼働する企業をつくりあげた、何かに生命をもたらした、という感情である。(ES 23)

「富や名声」から得られる「快樂」は「個人的、または社会的満足」(DS 49)を与えることで「生物に生命を維持させるため、自然によって考え出された手管」(ES 23)である。つまり、「仮構機能」と同じように「閉じた社会」の中で周囲との関係を保ち、「平衡」を維持するために働く。それに対して「歓喜」という感情は、創造すること、そして創造が継続されること自体へ向けられる。「快樂」が停止であるのに対して「歓喜」は前進である(DS 57)。したがって、「歓喜」を味わう者は、まさにそのことによって種の限界を乗り越えている。彼の創造は「模倣」「応答」であり、たとえ知られることも意識されることもなくても、その起源には「自然の抵抗を粉碎し、人類を新たな運命へ高めた」(DS 48)神秘家がいる。

結 論

『二源泉』は誤解を招きやすい書物である。その議論を単純化し、社会が特権的な個人に率いられて根本的な変容を遂げる、という図式だけを取り出すと、カリスマ性を持つ独裁者に熱狂する人々の姿が容易に連想されるだろう。本稿では、ベルクソンの想定した神秘家と人々との関係が、こ

うした事態とはかけ離れていることを示した。

神秘家に触れることそれ自体に何か決定的な意味があるのではない。重要なのは、創造の努力を受け継ぎ、創造を継続することである。そして、新たな創造は個人がそれぞれなすよりほかない。その意味で、神秘家は原初の創造の努力と各個人とを結ぶ「媒介」(DS 285)であるにすぎない。ただし、種としての人間の本性は、そのままではこうした創造の継続へと向かわないのであって、種という制約に束縛されない特権を持った神秘家の経験は、出発点として、あるいは突破口として不可欠であった。こうして『二源泉』において、神秘家は、たとえ目の前にある明確な「模範」という形を取らなくても、「潜在的牽引力」(DS 85)として人々を導く役割を担う。

(にしやま・てるお 慶應義塾大学文学部非常勤講師)

Le rôle du mystique dans *Les deux sources de la morale et de la religion* de Bergson

Teruo NISHIYAMA

Bergson distingue deux tendances de la vie humaine. L'une, spécifique, qui forme la société close. Chaque individu, doué de socialité comme attribut inné, est desiné à vivre dans une société close en entretenant avec elle l'équilibre instable. L'autre, le dépassement de cette première tendance, le retour à la vie originelle qui crée tout, et la continuation de cette création. Elle se réalise pleinement par quelques individus privilégiés, et partiellement par des hommes ordinaires qui les imitent. Cette deuxième tendance nous conduit à la société ouverte qui comprend l'humanité entière. Comme une société est digne de son nom par sa clôture, il est

difficile à comprendre cette idée «société ouverte». Difficile aussi à voir comment la création, essentiellement individuelle, constitue une société. Le but de cet article est de préciser le caractère de cette ouverture. Pour cela nous examinons le rôle que les individus privilégiés et ordinaires jouent dans ce processus.

* ベルクソンの著作からの引用は、以下の略号の後に *Quadrige* 版の頁数を付した。

EC: *L'évolution créatrice*, 1907

ES: *L'énergie spirituelle*, 1919

DS: *Les Deux Sources de la morale et de la religion*, 1932

- 1 実際には完全に「開かれた社会」も完全に「閉じた社会」も存在しない (DS 85)。「開かれた社会」への「移行」は、その実現というより、「開かれた」方向へ向かう運動である。
- 2 ベルクソンは孤立し、発展をやめた社会を「未開社会」と呼び、そのあり方について論じている (DS 143-4)。「未開社会」は「閉じた社会」だが、「閉じた社会」がすべて「未開社会」であるわけではない。
- 3 利己主義は「自尊心や、褒められたいという欲求」(DS 91)、つまり、虚栄心と不可分である。「すべての人が虚栄心に満ちており、そして虚栄心はまず社交性を意味する」(DS 92) のである以上、利己主義によってもたらされるのは、社会からの離脱というより、社会と個人との関係の変調であろう。
- 4 「反省は必ず予見を伴い、予見は必ず不安を伴い、不安は必ず一時的な生への密着のゆるみを伴う。」(DS 222) なお、「生への密着」に関しては Lapoujade (2010) を参照。
- 5 「市民としての徳は家庭で習得されるが、それと同様に祖国を愛することによって人類を愛する準備ができる、ということが好んで言われる。われわれの共感はこの連続的進展によって拡大し、同一〔の本性〕のまま大きくなり、ついには人類全体を包摂するだろう、と考えられている。」(DS 27)
- 6 「実際、他人の生命と財産を尊重することは社会的生活の基本的要求だと言われるとき、われわれはどのような社会について語っているのだろうか。これに答えるには、戦時中に何がなされたのかを考えれば十分だ。(略)裏切り、欺瞞、虚偽だけでなく、殺人や略奪さえ単に合法になるだけでなく、手柄なの

である。(略) もしこの時まで社会がわれわれに働めていたのが、人間の人間に対する態度だったとしたら、このようなことは起こりえるだろうか。全般にわたる、即座の変節 *transformation* がこれほどまで簡単になされるだろうか。」(DS 26)

- 7 神秘主義と哲学の関係について、ベルクソンに批判的な見解として De Belloy (2008) および De Belloy が依拠する Gilson (1960) を参照。
- 8 「とりわけ、神秘家の魂はものを単純に見る。この単純性は彼の言葉においても行動においても目を引くものであり、魂を導いて複雑な事態を切り抜けさせるのである。もっとも、魂はその複雑さに気づくこともないように見えるが。」(DS 246)

参考文献

De Belloy, o.p. (2008), «Le philosophe et la théologie», dans Warterlot, Ghislain (sous la direction de), *Bergson et la religion. Nouvelle perspectives sur les Deux Sources*, Paris, PUF.

Gilson, Etienne (1960), *Le Philosophe et la Théologie*, Paris, Fayard.

Lapoujade, David (2010), *Puissances du temps*, les Éditions de Minuit.